

## 建築学生からコンストラクションマネージャーへ

株式会社三菱地所設計  
コンストラクションマネジメント部 岡田 まどか

### 1. はじめに

2019年3月、大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻建築工学コースを卒業しました。大学院では建築・都市計画論領域（建築第3領域）にて、ガーナ・アクラの「非正規市街地」における土着コミュニティを対象とした研究をさせていただきました。卒業後は株式会社三菱地所設計に入社し、コンストラクションマネジメント（以下、CM）部に所属しています。現在3年目です。

私たち、コンストラクションマネージャー（以下、CMr）の役割は「発注者のパートナーとしてプロジェクトを推進すること」です。同じ「建物の価値を最大化する」という目標に向かって、基本構想段階から設計段階、施工段階、竣工後の運用（修繕・保全）段階まで一貫貫して発注者と併走する仕事です。

### 2. 修士研究とCM業務の連続性

なぜCMrになったのか、それは修士研究を通して得た価値観と繋がっています。「非正規市街地」である修士研究の対象地は建築・都市を語る上で欠かせない地図がありませんでした。そのため、現地調査における最初のミッションは地図作りでした。唯一の頼りである航空写真とレーザー距離計、色鉛筆を駆使し、現地のキーパーソンと共に歩いた時間は本当に貴重な思い出です。

転機となったのはガーナ滞在最終日に現地の方を対象に行った、調査結果（水衛生環境の実態、都市計画の変遷）および市街地改善提案の報告会です。私は、研究者の卵として専門性を帯びた言葉を発する一方で、限りなく現地の方に近い立場で一人一人の目を見ながら夢中になって働きかけました。これほど没頭できたのはどうしてなのか。考えた結果、専門家である第三者として、当事者には「当たり前」のものを明確化し、その価値の最大化に寄与できたから、という結論に達しました。

将来の道を選択する上で、弊社の会社説明会でCMを知ったとき、ガーナで得た価値観に重なるものを感じました。自分の家、職場のビル等、生活に密着しているからこそ建築物は日常生活に溶け込み、「当たり前」のよう

に存在しています。しかし、その「当たり前」の存在はそこに至るまでの多くの関係者の意思や思想の蓄積で形成されています。CMの立場として発注者の意思決定支援を行うことで、いずれは「当たり前」となる建物の価値向上に寄与できるのではないかと、その期待を胸に将来の道を選択しました。

### 3. スケールをシームレスに行き来する力

その期待通り、やりがいを味わいながら充実した日々を過ごしています。この2年でオフィス・娯楽施設・銀行・市庁舎等、複数プロジェクトに携わらせていただきました。それらの業務において共通して、意図的に意識し、自ら訓練していることがあります。それは「スケールをシームレスに行き来する力」です。

例えば、空間スケール。都市スケールからヒューマンスケール（そしてこれは利用者、来訪者、清掃車等の運用に携わる人ごとに）、ディテールまで、無数の意思決定においてCMrに想定する力が求められます。

時間スケールについても同じです。CMrは常にストーリー（枠組み）づくりと同時に、意思決定に至るプロセスや課題の履歴を整理し、正確に理解しておくことが求められます。計画建物が目標予算を大きく上回る場合、目標達成に向けた実現性の高い道筋を示すため、あらゆるパターンを想定し、設計者、施工者に対する最適なアプローチ、最も効果的な設計変更等の検討を進めます。その際、ヒントが検討プロセスにある場合があります。プロジェクトの確実な理解が最適な意思決定に繋がるのです。入社当初は目の前のことさえ理解できないこともありましたが、今では少しずつスケールの幅が広がっている気がしています。

### 4. 今後の抱負

入社後すぐに関わったプロジェクトも昨年春からリモート中心となったため、発注者の方と直接お会いする機会が激減しました。先日、数カ月ぶりに対面でお伺いした際、「お顔を見るときものすごく安心感がある」と声をか

けていただきました。その時、安心感という言葉に形容されたように発注者のパートナーであるCMrはプロジェクトにおける拠り所であらなければならないと再認識しました。CMrの存在なしで存在している建物数多くあります。それでも求められている限り、私たちは、建物の価値の向上のためにサポートしていく必要があります。

弊社のルーツは1890年に三菱社の設計監理組織として生まれたJ・コンドルを顧問とする「丸ノ内建築所」です。事業者として、数多くの建設プロジェクトに取り組んで

きた系譜から、発注者に寄り添う姿勢が徹底されているところが弊社の好きどころの一つです。その血筋を受け継げるよう成長していきたいと思います。

最後に結びといたしまして、このような執筆の機会を与えてくださった木多道宏教授、本紙事務局の皆様に感謝いたします。

(地球総合 平成29年卒 31年前期)